

「ケガレ」の意味に関する比較宗教学的考察

宮 本 要 太 郎

はじめに

宗教百科事典 (Encyclopedia of Religion) やブリタニカ百科事典 (Encyclopedia Britannica) にも記されているように、ケガレ (pollution) という観念は、その強調の度合いや対象となるもの・行為などで実に幅広い多様性が見られるものの、あらゆる文化に見出せるといえよう。¹⁾ところが、「ケガレ」の定義ということになると、ケガレとされる現象の現われが多様なコンテクスト（とりわけ政治的、歴史的、そして宗教的）によって幾重にも取り込まれていることから、ケガレそれ自体を定義することは極めて困難であると言わざるをえない。

そこで本論では、ユダヤ教と神道・民俗宗教という、異なる文化的・宗教的コンテクストにおける「ケガレ」現象を取り上げて論じること、そこに類似の現象を構造的に分析する可能性を呈示してみたい。もとより、小論においてケガレという現象の構造を明らかにすることなど望むべくもないが、これまでまったく異なる地平で論じられてきた議論を交差させてみることで、何らかの知見が得られることを期待したい。

なお、本論では二つの宗教伝統においてみられる類似の現象を指すのに、カタカナでケガレと表記する。もちろん

民俗学には、一九七〇年代以来、「ケガレ」に関する議論の集積があるが、ここではその成果を視野に入れながら、関根康正にならって、類似的現象を構造的に理解するための分析概念として「ケガレ」を使用したい^{2,3}。

一 宗教的コンテクストにおけるケガレ観念

(1) ユダヤ教におけるケガレ観

あらゆる文化においてケガレ現象が見られる一方、その重要性（特に社会秩序におけるそれ）は強弱に大きな幅が見られる。ここではまず、ケガレ観念が特に強く見られるとされるユダヤ教におけるケガレを取り上げたい³。

ユダヤ教の歴史においてそのケガレ観の根拠となってきたのは、なんとといっても、トーラー（モーセ五書）の「レビ記」（特にその十一章から十七章）であろう⁴。ユダヤ教の聖書の中に聖潔とケガレについてはつきりと定義されているわけではないが、ケガレに関する叙述の象徴的機能がケガレと聖性の著しい対照性を際立たせることにあることは疑いえない。その章句の多くは、さまざまな種類の不浄の指摘とそれを浄めることの重要性を説いているが、それは究極の聖性である神に近づくために自分自身を聖別して聖なる者となることが命じられているからである（「レビ記」十一章四十四節—四十五節）。そこで「汚れたもの」とされているのは、さまざまな種類の生き物とその死骸（十一章）、出産（十二章）や皮膚病（十三章）、そして身体からの漏出（十五章）など多様だが、これらの汚れ（ケガレ）に共通しているのは、それが人から人へ、人から物へ、あるいは物から人へと転移しうることである。この転移は直接間接の接触によっておこるだけではない。たとえば、人の死体の場合、同じ天幕の中にいるだけでケガレとされるのである⁵。

他方、多くの場合、これらのケガレは人の生において自然に発生するものであり、一定期間の後に浄められるとさ

れる。たとえば、月経中の女性は七日間ケガレの状態にあるが、それに触れる者はその日だけ不浄である。⁽⁶⁾あるいは人の死体に触れた者は、七日間ケガレる。⁽⁷⁾ここで確認できるように、浄めの第一は時間によるものである。その他にも、水で洗うことや適切な供儀を行なうことによってもケガレをはらうことができる⁽⁸⁾とされる。

清浄とケガレの細かい規定はすべて祭司の規定であることから、このレビ記は、聖書学でいうところの祭司資料(P資料)にあたるとされる。これらの規定はさらにタルムードやラビ文学でも重要な位置を占めており、ラビの律法は実質的にこの清浄の觀念に基づいているともいえる。⁽⁹⁾しかし、ラビたちによって体系化されていたこれらの觀念は、まず第一にエルサレム神殿を中心とした儀礼にとつて不可欠な清浄な状態の機能的な側面と結びついており、そこから、イスラエルの民に求められているのは、不浄を避けるということよりも、儀礼にふさわしい状態を意識することである、というジョナサン・クラワンスの指摘も妥当性を帯びてこよう。⁽¹⁰⁾

一方、「レビ記」における浄・不浄の觀念複合を、一つの包括的な象徴体系として見なすことを提唱したメアリー・ダグラスを援用してジェイコブ・ミルグロムは、不浄の源泉として皮膚病と漏出と死体の三つを抽出し、さらにそれらに通底しているものが「死」であると論じる。その上で、不浄と聖性とは反意語であり、したがって不浄と死の同一視は、聖性と生の同一視に帰着することを指摘する。⁽¹¹⁾儀礼的な浄・不浄の体系は、イスラエルの民にとつて、死(神からの別離)を拒絶し、生(神との和解)を選択せよという神の命令を象徴するのである。

(2) 神道・民俗宗教におけるケガレ観

日本の宗教においてケガレの觀念が特に注目されるのは、一つは神道における「穢」であり、もう一つは民俗学において注目されてきた「ケガレ」である。前者が「褻」や「祓」と共通の文脈においてもつばら論じられるのに対し、

後者は「ハレ」と「ケ」という対概念との関連性がしばしば問題にされてきた。両者は別々に議論されることが多いが、本論では、それらに共通する構造を視野に入れて、合わせて論じたい。

日本の神話的コンテクストにおいてもっとも古い「穢れ」観念を示しているのは、おそらくイザナギによる黄泉国訪問譚であろう。夫婦神であるイザナギとイザナミは協力して日本の国土や神々を生むが、その過程で火の神を生んだことによりイザナミは黄泉の国へと神去つてしまう。イザナギは黄泉の国へ逝つてしまったイザナミに会いに行くが、恐ろしい姿に変わり果ててしまったイザナミを見て、慌てて地上に逃げ帰つて来る。途中、イザナギは、「吾は伊那志許米志許米岐穢き国に在りけり。故、吾は御身の禊^せむ。」とのりたまひて、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到り坐して、禊^みぎ祓^はひたまひき」とされている。イザナギは、見るのも嫌なほど厭わしい穢き国に行つて来たから、禊をして身を浄めようとしたのである。

また、同じく『古事記』は、仲哀天皇が亡くなった時のことを、「[天皇のなきがらを] 殯宮に坐せて、更に国の大奴佐を取りて、生剥、逆剥、阿離、溝埋、屎戸、上通下通婚、馬婚、牛婚、鶏婚の罪の類を種種求きて、国の大祓を為て」と伝える。すなわち、天皇のなきがらを殯宮に安置するとともに、罪穢を祓うための贖物を国中から集め、国民が犯したさまざまな罪を求めて、国として大祓の行事を行なったのである。ここで注目されるのは、仲哀天皇の死因が、神（香椎宮において息長帯日売命に降りた神）のお告げを否定し、それが神の怒りを買ったとされていることである。すなわち、天皇が犯した罪に対する神罰としての死である。ここで罪はケガレの原因となっている。また、死そのものもケガレであつて、罪と死のケガレを同時に祓うことが国事として行なわれたのである。

このような罪と穢れの関係について、岡田重精は、意図的な行為などで生じる「罪」と自然発生的な不浄である「穢」とを分けた上で、前者を祓除するためには贖物を出させて「祓」をすることが必要であるが、後者を取り除くには「禊」

だけで良いことを指摘する。そしてさらに、これらがいずれも人間の共同体内部で生じるのに対し、外部で生じる「災」も含めて「不浄」を形成するとし、この三者が持つカオス的な力を忌避させる体系がイミ（斎・忌）であるとする。¹⁵

『古事記』に見られる神話的コンテクストにおけるケガレの観念は、記紀が編纂された当時の人々のケガレ観を反映したものといえるが、「延喜式」（延長五年（九二七）撰進、康保四年（九六七）施行）における触穢規定は、より現実的な文脈におけるケガレ観を伝えている。すなわち、人の死の穢れに触れた者は三〇日間、また、出産の穢れは七日間、さらに、六畜（牛、馬、羊、犬、鶏、豚）の死については五日間、その出産や食肉に關しては三日間を、それぞれ穢れの期間として、参内や神事への参加、神社の参拝などを謹慎するよう規定されているのである。¹⁶「穢れに触れたら、一定期間公務を慎む」という規定は何度も出され、しかも次第に複雑になっていく。このような穢れの観念は、貞観六年（八六四）の「貞観式」で定まり、九世紀から十世紀にかけて、つまり平安時代に肥大化を見せるという。¹⁷

女人結界というものが歴史上登場するのも、この九世紀頃のこととされている。¹⁸九世紀から十世紀にかけて、このような穢れ観が非常に複雑になり、また、展開して行つた理由としては、天皇の神聖性と、天皇が住んでいる御所を中心とした王城の清浄さを強調するため、これらと対比する形で、さまざまな穢れの意識が挙げられていったのではないかと言われている。¹⁹つまり、天皇を中心とした国家秩序を脅かすものを、穢れというふうに解釈し、その穢れを祓うためのさまざまな呪術や儀礼といったものが、複雑に展開していったのである。²⁰

二 ケガレ理論の再検討

(1) M・ダグラスのケガレ論

宗教の研究において「ケガレ」の概念が学問的に注目されるようになったのは、一九六六年に初版が出版されたダグラスの *Purity and Danger* (邦訳では「汚穢と禁忌」) をもって嚆矢とするのが妥当であろう。したがって、ケガレ現象をめぐる考察にあたつてダグラスの見解を押さえておくことは重要である。その中でダグラスは、「汚穢(dirt)の本質は無秩序(disorder)である」としたうえで、「汚穢とは場違ひ(matter out of place)なものである。……それは二つの条件を含意する。すなわち、一定の秩序ある諸関係と、その秩序の侵犯である。……汚穢があるところには必ず体系(system)が存在する。……汚穢とは事物の体系的秩序付けと分類の副産物である」と論じている。⁽²²⁾ このような視点は、具体的な事象を前提にするのではなく、ケガレという現象が成立する根拠を構造的に論じている点で、類似のあらゆる現象に適応しうる。また、ケガレに関する諸観念と社会規範との間に相補性を指摘したことは、当時としては斬新な視点であつた。それゆえこの学説は、ケガレ現象の理解に関してこれまでもっとも広く援用されてきたと言ってもよい。

ただし、広く人口に膾炙すればするほど批判も多くなるのは学説の宿命で、ダグラス理論にもさまざまな批判が提出されてきている。その中でも特に重要と思われるものとして、次の三点を挙げることができよう。まず第一に、いわゆる一般的な汚さ(ヨゴレ)とケガレとを区分せず論じていることから生じる混乱である。すなわち、英語の dirt や uncleanness を pollution と同義の概念として使用することで、用語法に曖昧性が生じているという指摘である。⁽²³⁾ また、ヨゴレとケガレとを同時に説明しようとすることで、しばしば心理的な解釈に偏りがちである。

このヨゴレとケガレの用語法上の混乱は、第二の批判とリンクしている。すなわち、ケガレと異常性 (anomaly) ないし無秩序 (disorder) とを直接的に (そしてしばしば心理的に偏つて) 結びつける点への批判である。すなわち、ケガレとされる現象が常に異常性や無秩序に分類されうるとしても、その逆は必ずしも言えない。たとえば、一方で単なる乱雑さはケガレと見なされないし、他方、「聖なるもの」としてタブーの対象になるものも異常性を帯びている。このような問題が生じてくるのは、ケガレを論ずるにあたってダグラスが、具体的な事象 (コンテキスト) ではなく「レビ記」というケガレに関する一つの体系的な思想 (テキスト) を対象にしたという点に原因を求めることができる。このことは、第三の批判点に現われている。すなわち、実際にケガレが問題となるような具体的なコンテキストからの批判に十分耐えられないのである。⁽²⁵⁾

(2) 日本の民俗学におけるケガレ論

日本の民間信仰において「穢れ」や「不浄」で示される観念が存在することは、民俗学では古くから知られており、もっぱら「忌み」との関係で論じられてきた。⁽²⁶⁾ それに対し、ハレとケという、柳田国男以来、対概念として用いられてきた両概念をめぐる議論の中から、「穢れ」や「不浄」をケガレと表記することでそれを民俗学の分析概念として用いようとする動きが生まれてくる。その先駆となったのが、ハレを清浄性・神聖性、ケを日常性・世俗性、そしてケガレを不浄性にそれぞれ対応させて、これら三項の相互関係によって民間信仰の多様性を論じようとした波平恵美子の業績である。⁽²⁷⁾ それによれば、ケとの関係で見たとき、ハレとケガレは共に非日常としてケと対立し、前者は神聖性に、後者は禁忌に関わる。

それに対し、桜井徳太郎は、ケガレを「ケ枯れ」と解釈する視点を定め、日常性であるケが衰えた状態 (ケガレ)

を回復するのがハレとしての祭であるとして、ケ↓ケガレ↓ハレ↓ケの循環論を唱えた⁽²⁸⁾。また、この論を援用して宮田登は、ケを毛（稲の靈力）および氣（人間の生命力）ととらえつつ、境界領域としてのケガレの存在を強調した⁽²⁹⁾。一方、新谷尚紀は、ケガレを死と定義した上で、生命活動に必然的に伴う不浄にして危険なものを包括的にケガレと概念化し、その価値の逆転現象からさらに神々が誕生するというメカニズムを主張している⁽³⁰⁾。

（3）関根康正によるケガレ論

民俗学の新谷と同様、南インドのタミル人社会を主たるフィールドとする人類学者の関根康正もケガレの創造性に注目する。関根は、インドのカースト社会が浄・不浄というイデオロギーによって規定されているというルイ・デュモンに対し、それが秩序中心的な見方にとどまっていると批判する⁽³¹⁾。その上で、タミル語でケガレに相当するティーツトゥという言葉が用いられるコンテクストを分析しながら、それを「死の脅威（他界性の突出という境界経験）」という主観的感覚の表現であるととらえている⁽³²⁾。「永久的ケガレ」すなわち社会差別的ケガレを「不浄」として、「一時的ケガレ」である「ケガレ」と区別し、前者にケガレの排除、後者にケガレの受容を見ることが、関根は、ケガレのポジティブな側面を論じる地平を提供しているといえよう⁽³³⁾。

三 ケガレ観念の普遍性について

以上、断片的にはあるが、ケガレの現象およびそれに関する理論について素描した。次に、それらを基底としつつ、ケガレの普遍性に関する考察を試みたい。宗教的な意味でのケガレに特徴的なのは、それが必然的に浄めの儀礼（purification rite）を伴うということである。このケガレの浄めがどのような目的で行われるかについては、さまざま

な理由付けがされている。一つは、罪滅ぼしである。犯した罪に対して、ただ罰を与えるだけではなく、何らかの浄めの儀礼を必要とするという考えである。また、病気からの癒し、あるいは、再生儀礼など、さまざまな目的のために、浄めの儀礼が行われる。この浄めの儀礼が行われるに先立って、purity (清浄) と pollution (不浄・ケガレ) という二元論的な発想が、ほぼ世界的に見られるという³⁴⁾。

不浄(ケガレ)と清浄という観念は、普遍的に見られるが、何をすればケガレとされるのか、ということについては多様である。大きく分けると、社会規範や共同体のルールに反する行為の結果、ケガレがもたらされる場合と、血や死のように、当事者の意図とは関係なく生じる場合とに分けることができる。これは、先ほどの、罪・穢れと対応しているが、実際にケガレとされるものや行為については、非常に多岐に渡っている。ただ、共通している部分として、物理的あるいは衛生学的な観念である汚れと、呪術的、宗教的な意味合いの穢れというものが象徴論的に結びつけられやすいという点を挙げておきたい。それが不浄(ケガレ)ということになる。

もう一つ普遍的に見られるのは、そういった不浄(ケガレ)というものが、容易に伝播・伝染しうると観念されていることである。伝播ないし伝染することによって災いや不幸が発生するから、危険視される。それゆえに、浄めの儀礼によってケガレを取り払うことが必要とされるのである。ケガレたものは危険であるから、そういうケガレた状態にある物質や人間をタブーの対象として隔離する。これもほぼ普遍的に見られる現象である。

なぜケガレが存在するのかについては、いろいろな説明や解釈がなされてきた。その代表的な解釈が、秩序化できない異常なものは秩序を破壊する危険なものであるので、ケガレとして分けられねばならなかったとするダグラスの説明であった。この、人間の文化や社会による秩序化を拒む最大のものが「死」である。死は、秩序化できない。人間がコントロールすることができないもの、その最たるものが死である。だから世界中で、死というものは、ケガレ

と結び付けられている。ダグラスは、このようにケガレと見なされるものは、秩序にとつては危険な存在であるが、逆に、その危険な存在が秩序を活性化する可能性を秘めているとも指摘している。

その一例として考えられるのが、ケガレを祓うという行為のもつ創造性である。記紀神話の伝える世界創造が、混沌の世界、暗黒の世界を祓い浄めることの結果であることを説きつつ、原田敏明は「祓禊とは単に不浄を祓うというだけでなく、新しく清浄の世界を創造することでもある」と指摘している。⁽³⁵⁾ここではさらに踏み込んで、世界の（再）創造の契機は混沌の中にこそあり、それを引き出す契機となるものをケガレと見なすことの可能性を考えたい。たとえば、それに関連して藺田稔は、イザナミの死という「神の死自体は、生命的コスモスに必然の帰結として語り出されながら、カオスの他界（黄泉）に帰属する不浄の範疇、すなわち穢れ（汚垢）として表象することによって世界生命全体を脅かし得る危険な属性となり、さらには祭式的に世界を再生せしめる重大な契機または動機ともなったことを忘れてはならない」と論じているが、傾聴に値しよう。すなわち、ケガレは両義的な力の存在を指摘する象徴的言語なのである。⁽³⁷⁾

また、聖俗二元論と聖の両義性からケガレを説明することも可能である。聖とは、簡単に言えば俗でないものである。人間の生の営みは俗であるから、聖は、生の営みや社会秩序に収まり切らない、あるいは、それを超越したものであるといえよう。この聖俗二元論で俗ではないものを見たとき、一方で神聖・清浄なもの、他方でケガレ的なもの、危険なもの、タブー視されるものがある。つまり、聖は、神聖という側面と、恐れられ、忌避される側面、換言すれば、不浄なもの、ケガレたものとして恐れられるものと分けることが可能である。⁽³⁸⁾また、民俗学の分野でも、波平は、「ハレ」と「ケガレ」を、俗なる「ケ」に対して、聖なるものの両義的な側面であることを示唆している。⁽³⁹⁾

このように見ていくと、「ケガレ」は、聖なるものの両義性の一つであることが理解できる。神聖なるもの（清浄

なるもの」も、ケガレも、どちらもタブー（禁忌）の対象になる。人々が日常の生活を営んでいる世界を「俗」とすると、それを否定するもの、脅かすモノやコトが、タブーの対象になっているわけである。タブーの対象になる最たるものが、死と出産であろう。死と出産には、しばしばさまざまなタブーが、いろいろな形で付きまとう。死も出産も、言わば、俗なる世界と俗でない世界との境界線上の出来事であり、ゆえにタブーの対象となり、あるいはケガレと観念されるのである。

四 ケガレ現象の多様性について

ケガレが観念として普遍性を有していると考えられる一方で、その現象としての現われには多様性が見られる。ここではその一端に触れておきたい。死のケガレについて、それを非常に強く忌避する場合と、そうでない場合とがある。それを考えるきっかけとして、両墓制と屋敷墓というものを挙げることでしよう。

両墓制とは、最近では少なくなつて来ているが、近畿地方や関東地方によく見られたもので、遺体を葬る墓と死者の霊を祀る墓が、別々の場所にあるというものである。遺体を葬る方の墓を「埋め墓」といい、多くは山中にある。これに対し、村はずれなどに「参り墓」と呼ばれる、死者の供養を行うための墓を設ける。こちらには遺体は入れない。二つの機能を分けて別々の墓を作るのである。遺体は死の穢れに満ちているから、いったん墓に遺体を埋めてしまったらそこには行かない。しかし、死者の靈魂は、供養し祀らなければならぬので、別の清浄な場所に祭祀・供養を行うための墓を建てたのである。両墓制は、死の穢れという観念の存在を証明する事例として注目されてきた。

しかし、一方で、屋敷墓というものも存在する。屋敷墓とは、屋敷の敷地内に遺体を埋め、墓を作るというものである。この屋敷墓と両墓制とを比較してみると、見事に住み分けがなされていることが指摘されている。すなわち、

両墓制は畿内と関東に集中してみられるのである。このように両墓制が関東や畿内に分布しているのは、死の穢れ観が江戸と京都を中心として、同心円状に広がっていったことの現われではないかとされている。⁽¹⁰⁾ 両墓制は、死の穢れを非常に強く意識した形態だが、それに対し、屋敷墓は、遺体を屋敷の敷地内に埋葬するわけであるから、死の穢れが強くは意識されていないということになる。屋敷墓に見られるように、もともと死の穢れは、それほど強く意識されていなかったが、近世になって、死の穢れが強く反映された両墓制が誕生し、京都や江戸を中心に広がった。これは、中央集権制という秩序を維持するため、死の穢れが利用されたと考えられる。

縄文時代の環状集落と弥生時代の環濠集落も、やはり死の穢れについて非常に興味深い対比を示している。⁽¹¹⁾ 環状集落とは、中央に広場があり、その周りに住居があつて、さらにその周りに食糧などを貯蔵するための穴があるという集落である。そして、中央の広場には墓穴がある。村の中央に死者を埋葬し、その周りに人々が住んでいる。中央の広場は、死者を埋葬した場所であると同時に、そこで祭祀が司られた。環状集落は、死者を中心にした同心円状の構造になっているのである。

これに対して、弥生時代の環濠集落は、大陸から日本に入つて来たものである。環濠集落では、人々が住む住居を濠で囲み、あるいは堀や柵を作つて外敵から身を守る構造であつた。環濠集落の中からは、人骨は出てきていない。つまり、死者は集落の外に葬られたのである。もちろん、祭祀は環濠集落の中で行われるわけだが、その祭祀のための空間と死者のための空間を隔離している。

死の穢れについて、屋敷墓や環状集落に見られるように、それほど強く意識されていない事例もあれば、両墓制や環濠集落のように、はっきりと意識されている事例もあつて、一概に、死の穢れが普遍的だとは言えない。ケガレやタブーという観念が普遍的に存在するとしても、その具体的な現れは、歴史的、社会的、文化的な背景によつて異なる

つているという実態を考慮しなければならない。⁽⁴²⁾

五 ケガレの三重構造

最後に、ケガレの三重構造について述べておきたい。この三つの次元で捉えることがケガレを理解する上で有効ではないかと思われる。

(1) 心理的・生理的感覚としてのけがれ感

この意味でのけがれ感は、身体と不可分のものであり、心理的・生理的に感覚される次元でのケガレである。たとえば、唾液や血液が身体の外にある場合、それは生理的な不快感を誘引する。⁽⁴³⁾これは、単なる生理的な反応だけでは説明できない、心理的な不快感・不安感と結びついている。人間の唾液は、人間の体内にある限り、人間の生と一体化している。しかも、食べたものを消化するために非常に大切なものである。しかし、それがいったん体から離れてしまうと、それは、人間の生とは離れた場違いなものになる。血液も同様である。血液は、人間の体内にあってこそ生を支える。ところが、人間の体から離れてしまうと、非常に場違いなもの、異常なものとして、非常に強い心理的不安感、不快感を引き起こす。これが、ケガレの感覚的な側面だと言える。

(2) 象徴的観念(コスモロジー)としてのケガレ観

社会秩序や宇宙を説明する原理と、その説明や秩序の中に入り切らないものとの二分法から言えば、その秩序に入り切らない、すなわち、人間が充分認識できないものや不合理なもの、あるいは不条理なものが「ケガレ」と見なさ

れる。これは、言わば象徴的な次元でのケガレであり、コスモロジカルな意味でのケガレと言えよう。つまり、人間が世界を認識するとき、その認識を超越したものはカオス的なものとしてケガレの範疇に含まれるのである。

(3) 社会的意識（イデオロギー）としての穢れ意識

人間が社会を構築する時、常にその秩序からはみ出すものが存在する。それは社会にとつては危険な要因となりうるから、排除の対象となる。その排除の意識が対象に投影されたものが「穢れ」として表象される。これは、社会的、歴史的に形成された意識であり、差別を生み出すものとして機能する。社会関係が生じる場面では常に、秩序を維持するため、秩序に反するものを差別しようとする力が働くが、その差別を正当化する原理として使われる穢れ意識は、イデオロギーとしての穢れ意識であるといえる。

重要なのは、これら三つの次元でのケガレが相補的に関連しており、どれか一つに還元して説明され尽くすものではないということである。¹⁴⁾

おわりに——現代社会におけるケガレの記号化について

個々の宗教伝統において、ケガレという観念は根拠のない非科学的・非合理的なものであるばかりでなく、差別の温床にもなっているとして、このような観念そのものを排除しようとする動きが、特に近年強く見られるように思われる。¹⁵⁾確かに、ケガレの概念を操作することである特定の人々を抑圧・排除し、もって特定の社会秩序を維持しようとしてきた歴史の存在は事実として認めねばならない。しかし、本論において確認できたように、さまざまなコンテクストにおいて研究者たちが論じてきたことは、ケガレが必ずしも否定的で抑圧的な力として働くだけではないとい

う点である。

むしろ、たとえ「ケガレ」や「不浄」の観念をいかに排除しようとも、人間が生きて社会生活を営む限り、差別を生み出す構図は絶えず再生産されるであろう。たとえば学校などにおけるイジメの現場では、「バイキン」というレッテルがしばしば用いられる。この言葉は、積極的な側面を持たない点で「ケガレ」よりもっと陰湿であると考えられる。ここでは、記号化されたレッテルが意識的・無意識的に排除の構造を作り出している。制度的差別と結びついてきた諸観念とそれを支えてきた意識を批判的に相対化することは必要なことだが、より問題なのは、民俗の知によって生ざられてきたケガレのダイナミズムが、非人間的な記号によつて置き換えられてしまうことではないだろうか。

注

(1) ただし、どちらの百科事典も「浄め」(“Purification” in *Encyclopedia of Religion*) ないし「浄めの儀礼と慣習」(“Purification Rites and Customs” in *Encyclopedia Britannica*) の項目の中でケガレ (Pollution) が取り上げられている。この二つは (少なくとも) 宗教的なコンテキストにおける「ケガレ」は「浄め」(Purification) とは切り離すことができないという興味深い事実に気づかせる。ひるがえつて『宗教学辞典』(東京大学出版会、一九七三年) では「浄め」(および「穢い」) の項目で論じられている。逆に『日本民俗大辞典』(吉川弘文館、一九九九年) では「ケガレ」の項目が独立している。

(2) 関根・新谷、二〇〇七、一九八―二一六頁。

(3) ちなみに宗教百科事典において「浄め」の項目は「概観」(An Overview) と「ユダヤ教における浄め」(Purification in Judaism) の二つの論考のみで構成されている。

(4) この他にも、「レビ記」の五章、「民数記」の十九章と三十一章、「申命記」の十四章、二十三章、二十四章、および二十六章などに関連した項目を見出せる (Hayes, 2007, p.557)。

- (5) 「人が天幕の中で死んだときの教えは次のとおりである。そのとき天幕に入った者、あるいはその中にいた者はすべて、七日の間汚れる。」(民数記十九章十四節) なお、聖書からの引用は日本聖書協会の新共同訳によった。
- (6) 「女性の生理が始まったならば、七日間は月経期間であり、この期間に彼女に触れた人はすべて夕方まで汚れている。」(レビ記十五章十九節)
- (7) 「どのような人の死体であれ、それに触れた者は七日の間汚れる。」(民数記十九章十二節)
- (8) ここで「浄いこと」「汚れていること」とされる言葉は、ヘブライ語ではそれぞれ *taharah* と *tum'ah* に相当するが、これらを「浄いこと」(英語では *purity* ないし *cleanness*) および「汚れていること」(同じく *impurity* ないし *uncleanness*) と訳すことを問題視する立場もある。たとえばアメリカの高官なラビであるノルマン・ラムは、本来精神的な意味で用いられるべき用語を物理的な意味へと誤って導きかねないそのような訳語が正確でないとして、*taharat* と *tum'ah* を純粹に律法上の意味で(すなわちそれぞれの状況における行為上の義務に限定して)用いることを提唱している (Lamm, 1968, p.24)。また、アレイ・カプランも、浄・不浄をあくまでも儀礼のコンテクストに限定して理解することを強調する (Kaplan, 1982, p.10)。両者ともにミクヴァ(ユダヤ教における儀礼的な浸礼、およびその場所)をめぐる同様の議論を展開していることは興味深い。
- (9) たとえば紀元二世紀末頃までに成立した最初のラビ法典集であるミシュナーは、六つに大別されるその内容の一つを「祭儀上の浄・不浄」の法に当てている。
- (10) Klawans, 2000, p.6。もともと、儀礼的な浄・不浄の観念はエルサレム神殿の聖性と強く結びついていたために、その神殿が失われしまった後は、その実効性を徐々に失ってしまふことになる。
- (11) Milgrom, 2004, p.12.
- (12) 『古事記 祝詞』(日本古典文学大系一) 岩波書店、一九五八年、六九頁。旧字体は新字体に直した。
- (13) 同、二二九頁。旧字体は新字体に直した。
- (14) 国の行事としての大祓が制定されたのは天武朝のころと推定される。『古事記 上代歌謡』(日本古典文学全集一) 小学館、一九七三年、二二七頁の注。
- (15) 岡田、一九八二、八四―八五頁。
- (16) 『校訂 延喜式 上巻』大岡山書店、一九二九年、八四頁。ちなみに「弘仁式」の逸文にもこれと合致するものがあることから、

この規定は平安時代初期に遡ることができる（宮城栄昌『延喜式の研究 史料篇』大修館書店、一九五五年、六十頁）。

- (17) 三橋、一九八九。
- (18) 牛山、一九九六。
- (19) 大山、一九七八。
- (20) そこには、仏教や陰陽道が重要な関与をしている。特に陰陽道である。陰陽道は、死、血、出産や糞尿、あるいは病氣災害、怨霊、物の怪などをすべて、浄穢の観念、さらに吉凶という観念と結び付け、細かい浄穢観、吉凶観を作り出した。その結果、平安時代には、死に関する不浄・穢れ観、また、血液、特に月経血に対する不浄・穢れ観が、確固たるものになったと言われている（村山、一九八一、鈴木、二〇〇二）。
- (21) Douglas, 1966, p.21, ダグラス、一九七二、二五頁。
- (22) Ibid. p.36. 同、七九頁。
- (23) たとえば、鈴木、二〇〇二。
- (24) たとえば、Meigs, 1978.
- (25) たとえば、Sekine, 1989.
- (26) 波平、一九八五、一九二二頁。
- (27) 波平、一九八四、および、波平、一九八五、など。
- (28) 桜井、一九八五。
- (29) 宮田、一九九六。
- (30) 新谷、一九九七。
- (31) デュモン、二〇〇一、関根、一九九五。
- (32) 関根、同、一一六頁。
- (33) 関根、二〇〇四、および、関根・新谷、二〇〇七。
- (34) Preston, 2005, p.7503.
- (35) 原田、一九七二、二二四頁。

- (36) 蘭田、一九九〇、二〇三頁。
- (37) 関根、二〇〇四、四二頁。
- (38) このような両義性は、日本語の「イミ」、漢字では「齋」「忌」という二つの文字にも見られる。この二つの文字は、本来は同じような意味内容を指しており、もとは「いむ」という動詞から来ている。「いむ」とは、神事に慎むこと、つまり、心を清浄にするということ、ケガレたものをはばかるという、両方の意味があった。それが、漢字としては、二種類の文字が使われ、清浄とケガレとを分離していくわけだが、本来は、聖の両義性を指している言葉だった。このように、「イミ」という日本語にも、聖の両義性を見ることが出来る(原田、一九七二)。
- (39) 波平、一九八四、および波平、一九八五。
- (40) 新谷、一九九一。
- (41) 赤坂、二〇〇〇。
- (42) もう一つ興味深い事例として、西国の神社縁起では殺生禁断や触穢思想が強調されるのに対し、東国のそれでは殺生に対する罪悪感が見られないばかりか、狩猟を動物に仏果を与える手段とさえされているという指摘がある(伊藤、一九八五)。
- (43) 関根は、南インド社会で多くの人が切られた爪、抜け落ちた毛、吐かれた唾、流血をティットウ(ケガレ)と見なしていることを紹介している(関根、二〇〇四、三七頁)。
- (44) 祭の現象学的な考察において蘭田は、ミハイル・バフチンの呈示した祝祭のイメージを借りながら、「祝祭の宇宙的な想像力が、完成された公的權威や秩序を前提にしてこそ実現する」(蘭田、一九九〇、一三七頁)と論じているが、その指摘はケガレにも援用しうる。
- (45) たとえばユダヤ教や修験道に対するフェミニズムからの批判的言説やヒンドゥー教における不可触民を中心とした平等主義への動きなど。

引用・参考文献

- 赤坂憲雄『東西／南北考』岩波書店、二〇〇〇年。
- 伊藤喜良『南北朝動乱期の社会と思想』講座 日本歴史 4 中世 2 東京大学出版会、一九八五年。

牛山佳幸『「女人禁制」再論』『山岳修験』十七号、一九九六年。

大山喬平「中世の身分制と国家」同『日本中世農村史の研究』岩波書店、一九七八年。

岡田重精『古代の齋忌』国書刊行会、一九八二年。

沖浦和光、宮田登『ケガレ——差別思想の深層』解放出版社、一九九九年。

亀井千歩子『塩の民俗学』東京書籍、一九七九年。

小谷汪之「カーストとカースト制度」小谷汪之編『現代南アジア⑤社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会、二〇〇三年。

桜井徳太郎『結衆の原点——共同体の崩壊と再生』弘文堂、一九八五年。

新谷尚紀『尚幕制と他界観』吉川弘文館、一九九一年。

新谷尚紀『ケガレからカミヘ』岩田書院、一九九七年。

鈴木千代乃『神道民俗芸能の源流』国書刊行会、一九八八年。

鈴木正崇『女人禁制』吉川弘文館、二〇〇二年。

関根康正『ケガレの人類学——南インド・ハリジャンの生活世界』東京大学出版会、一九九五年。

関根康正『ケガレと差別』末木文美士編『岩波講座 宗教 第8巻・暴力』岩波書店、二〇〇四年。

関根康正・新谷尚紀編『排除する社会・受容する社会——現代ケガレ論』吉川弘文館、二〇〇七年。

蘭田稔『祭りの現象学』弘文堂、一九九〇年。

高取正男『神道の成立』平凡社、一九七九年。

メアリー・ダグラス（塚本利明訳）『汚穢と禁忌』思潮社、一九七二年。Douglas, Mary, *Purity and Danger: An Analysis of the*

Concepts Pollution and Taboo, London: Routledge & Kegan Paul, 1966.

ルイ・デュモン（田中雅一・渡辺公三共訳）『ホモ・ヒエラルキクス——カースト体系とその意味』みすず書房、二〇〇一年。

波平恵美子『ケガレの構造』青土社、一九八四年。

波平恵美子『ケガレ』東京堂出版、一九八五年。

沼部春友「祓と禊」蘭田稔編『神道 日本の民族宗教』弘文堂、一九八八年。

服藤早苗ほか編『ケガレの文化史——物語・ジェンダー・儀礼』森話社、二〇〇五年。

- 原田敏明『日本古代思想』中央公論社、一九七二年。
- 三橋正『「延喜式」機規定と機意識』『延喜式研究』2、一九八九年。
- 宮田登『ケガレの民俗誌——差別の文化的要因』人文書院、一九九六年。
- 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房、一九八一年。
- 門馬幸夫『「穢れ」と差別』赤坂憲雄、中村生雄、原田信男、三浦佑之編『いくつもの日本Ⅴ 排除の時空を超えて』岩波書店、二〇〇三年。
- 山本幸司『穢と大穢』平凡社、一九九二年。
- 横井清『中世民衆の生活文化』東京大学出版会、一九八〇年。
- Fonrobert, Charlotte Elisheva, "Purification: Purification in Judaism," in *Encyclopedia of Religion*, 2nd ed. Detroit: Macmillan Reference USA, 2005.
- Fonrobert, Charlotte Elisheva, *Menstrual Purity: Rabbinic and Christian Reconstructions of Biblical Gender*, Stanford: Stanford University Press, 2000.
- Hayes, Christine, "Ritual Purity and Impurity," in *Encyclopaedia Judaica*, 2nd ed. Detroit: Macmillan Reference USA, 2007.
- Kaplan, Aryeh, *Waters of Eden: An Exploration of the Concept of Mikvah: Renewal and Rebirth*, 2nd ed. New York: National Conference of Synagogue Youth of the Union of Orthodox Jewish Congregations of America, 1982.
- Klawans, Jonathan, *Impurity and Sin in Ancient Judaism*, New York: Oxford University Press, 2000.
- Lamm, Norman, *A Hedge of Roses: Some Jewish Insights into Sex and Marriage*, London: Clarendon Foundation, 1968.
- Meigs, Anna S., "Papuan Perspective on Pollution," in *Man*, 13, 1978.
- Meigs, Anna S., *Food, Sex, and Pollution: A New Guinea Religion*, New Brunswick: Rutgers University Press, c1984.
- Milgrom, Jacob, *Leviticus: A Book of Ritual and Ethics*, Minneapolis: Fortress Press, 2004.
- Preston, James J., "Purification: An Overview," in *Encyclopedia of Religion*, 2nd ed. Detroit: Macmillan Reference USA, 2005.
- Sehne, Yasumasa, *Theories of Pollution: Theoretical Perspective and Practice in a South Indian Tamil Village*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1989.